色彩環境論(2) 都市問題に色彩を問う背景について

山岸政雄

前稿(1)「土木と色彩」においては、土木施設と色彩景観について、当該研究者が関係した事例から、色彩の調査や評価及び計画方法の変遷について説明を試みた。その折、これら多数の事例の背景には、都市の生い立ちにかかわる境遇に注視点のあることを知った。そこで本稿では、現今関心が持たれている都市の色彩問題とその背景に、この視点がどのように関わっているのかを考察してみたい。主な事例とする都市は金沢である。なお稿中の、東京、横浜、京都、姫路、新潟のデーターは問題の兆を伺い知るためのテストチャートとして用いた。

まず境遇を説明するキーワードとしては、立場や身元、身の上、格式、地位、貴賤、貧富、運命、禍福、安否、災い、繁忙などがある。この中で、最も都市の境遇に近づく鍵は、格式や資格といった、都市を人身に類比させる概念であることが事例の考察から浮んだ。

したがって、本稿における背景論は、色彩環境からアプローチする都市の風格論でもある。

近年の都市間競争は、違いを際立たせて説明しながら、一方では似寄れる項目を見い出し、共存共栄をしようとする予定調和が基底となっている。風格はこの目標概念の言い換えでもある。

このような流れのなかで都市と色彩はどのように連関され、諒承されているのであろうか考察してみたい。

まず目標とされる風格については、次の様な概念の位置付けをしたい。

「格」は、よく彼とは格が違う、あるいは昇格をしたとか、大臣格で列席をしたなどに使われる。つまり格式や身分の違いの確認に日常使われて、本質は人事に関わっている言葉である。いくらか布衍して使えば、格式を重んじた旧家や格式張るなど、身分や家柄にも及ぶ概念である。ある都市は、他の都市とは格が違うという使われ方であろう。このように「格」の意味は一身に関わる事柄に作用している。したがって、この視点からの都市論は、まさに都市境遇論なのである。

「格」が境遇に連なる差異概念であるならば、立派な風格を持つ都市という場合には、その人を特徴づける味わいのある人格に当たる部位を、都市に置き換えて表現しなければならない。そこで色彩の表情がこの裏付けをしているのではないかと考えた。つまり、その身振り、態度、容貌、心境、才能に至る全人格で期待されるような都市格の色彩による裏付け考証である。

したがって本研究の過程では、考察の対象を特徴ある色彩様相に分けて、そこに暗示され、あるいは示唆をされている意味作用を問う。また、都市の精神的及び道徳的特質、性格、品性も問いの対象とされた。

対象とする色彩環境

1．都市の保全開発建築と色彩

都市を観察する場合、慣用的に旧市街と新市域という分け方がしばしば用いられ、色彩による施策比較の対象となる。

金沢においても、前者は伝統的な中心区域であり、後者は開発の進む、主としてJR金沢駅西地区を指す。この両立する都市構造は、

複眼性の特質を有するため、市域形成の基調とされている。したがって、色彩による独自なイメージの創出も期待され、地区計画導入の折にも反映されてきた。

同様な問題に直面し、問題を提起解決してきた都市は数多い。たとえば新潟市における信濃川を境にした、西新潟中心部も、再開発の進む駅東地区も理念を同じくする。また、新幹線の開通以来、姫路市では、優美な姫路城を望む大手前通り地区と、JR 姫路駅南大路地区が、都市景観の保全をめぐって、色彩による有効性が模索検討されている。いづれの都市においても、伝統と現代の調和を色彩に託して位置づけたい願いが施策に盛られている。

一方、建造物の色彩で都市の特質を示すことも風格の対象として大きな位置を占めている。たとえば札幌の時計台と、背景をなす時計台ビルの調和した色彩はよく知られている。

あるいは、横浜の JR 関内駅周辺と市庁舎をめぐるセピアゾーンの色彩施工も先駆例として以前から知られている。

金沢においても、やがて500年におよぶ伝統の意味合いを建造物の色彩で何とか説明をしたいとの願いも強い。ことに木造建築にみられる色彩景観の復活が期待されている。

札幌の場合は色彩の表情として、横浜の場合は色彩使用のシステムとして、金沢の場合は木造建築が朽ちていくときの予後の色彩変化に、それぞれの風格を説明する差異類同がある。

さらに現在性を指向し、示唆に富んだ背景を明示している例は、「多摩ニュータウンベルコリーヌ南大沢（第15住区）ニュータウン色彩計画」(東京都南多摩新都市開発本部／住宅・都市整備公団東京支社)に実現したロケーションに見られる風格・資格である。

南仏のリヨン近郊の山岳都市をモデルとしたようなこの街区は、色彩のみならず、そこここに市民意識（シチズンシップ）が採択され、景観価値が共有財となっている。システムデザインをコーディネイトするブロックアーキテクトとマスターアーキテクトが民主的相来至恵の精神で超団地の夢に迫った初の試みで注目されている。そこには、本音で迫る居住快適の権利に市民レベルの善意ある回答が示されている。ちなみに、ベルコリーヌ(BELLE COLLINE) は美しい丘というフランス話である。そして、この住区の色彩と風格は次の諸点によっても明快に都市問題の背景に解を与えている。

まずこの住区のプロフィールを明らかにしておきたい。

わが国の住宅政策が本格的な都市集住（団地）に対応せざるを得なくなったのは1960年頃からである。いわゆる木賃アパートからコ

多摩ニュータウン　ベルコリーヌ南大沢

ンクリートの巨大団地が産業再生産の基地化する時代で、俗にベットタウンとも言われ始めた頃である。

ベルコリーヌ南大沢住区（東京都八王子市南大沢５丁目、66ヘクタール、1500戸）は、これら一連の団地開発の究極モデルとして、1965年に計画された多摩ニュータウン（東京都稲城市・多摩市・八王子市・町田市1971年第１次分譲入居）の建設延長上にある最も新しいシチズンタウンと言えよう。教育施設は幼稚園、小学校、中学校が開かれ、平成３年には、東京都立大学の総合移転先として建設が進んでいる。ことに、大学のキャンパスデザイン（大谷幸夫）は、地区、近隣の景観に調和するよう綿密になされている。

次にこの住区がどのように色彩で都市問題を問い解を与えつつあるかを考えてみたい。解を与えるソフトは風格、資格、シチズンシップにある。そのために用意された色彩計画のコンセプトは、次のように示されている。（北嶋祥浩－建築文化 MAY 1990）北嶋祥浩氏の報告によれば、基調色は土地風土と結びついたアースカラー（茶系）を採用したこと。このカラーレンジ（色域）はマスター・アーキテクトによって設定され、ブロック棟の担当者はこの色調の中で自由裁量をしている。

屋根色は５色の基調色から３色を選んで各ブロックにディテールトーンの創出も考えられたが、実施された色彩は全て同一配合の茶系パターンにまとめられた。なお、組み合わせを全体に固定したことに反省点もあるという。

ここまで述べ拡げてきた問題点や参考点は、都市の色彩現象にどのように現われ、また兆しとなっているであろうか。以下各都市のチャートから読み取ってみたい。（６Ｐ～11Ｐ）

なお、ここでは、L*a*b* における数値（CILAB-1976）からHV/C を引き出し、系統、慣用色名並びに日本伝統色名、等の用語による様相解読とした。

２．緑景からの問い。

緑景は都市問題でいつも主題に近いところに通常位置づけられる。それは、炭酸同化作用による空気の浄化や保水、静寂感、緑色による潤い感、木陰の創出、あるいは見えかくれによる都市景観の演出要素、防火材としてなどなどそのはかり知れない効用ゆえにである。都市という高密度集住空間に一定の平等な配分価値をもたらす唯一の自然尺度でもある。つまり都市に持ち込める生態系のリズムとしては唯しも納得する対象であろう。

さらに緑景が問われる理由は、緑樹のあるところに水脈があるというオアシス論にある。

緑被量と、緑色をめぐる都市観相の評価は、複合的要因の中にある。いわば、現象する景観色が、当面の意義や事実に、他の意義または事実が重なるという、コノテーションレベルが相当する。

たとえば、金沢市は昭和49年緑の都市宣言をして、緑被率の向上や、緑量の改善に努めてきた。なかでも重視されたことは、見えている緑景色と、加賀藩以来、街中に四通八達している、農業、生活用水との意味の重なりを整序することであった。

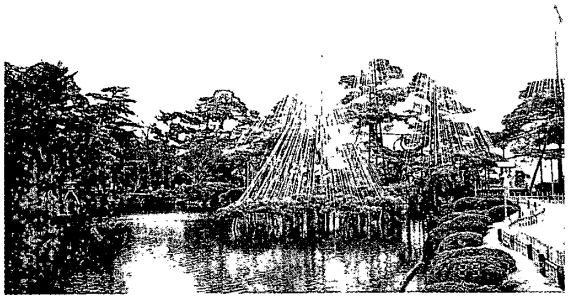
そして、現在までに主な用水路は整備復活され、一応の目的は達せられた。

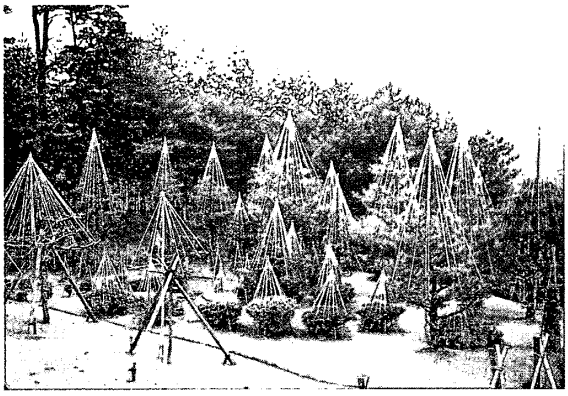
もうひとつ金沢の緑景が助長され、森の都を支えている色彩系の背景として樹木の雪吊りがある。（４Ｐ）

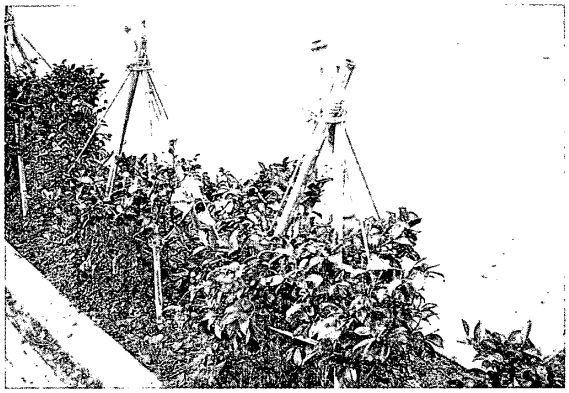
雪吊りは、雪損から樹木を守るための知恵から生まれた。金沢では11月になると、常緑樹はもちろんのこと、ほとんどあらゆる街路樹、庭園樹に雪吊りが施される。兼六園のそれは日本の冬の風物詩とさえなった。

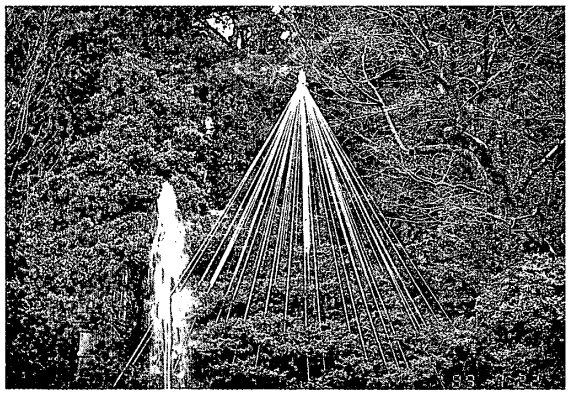
緑景と雪吊りの助長関係は、隣家とはいくぶん違いを創造しながらも、歩調を会わせ緑景を讃えることにある。

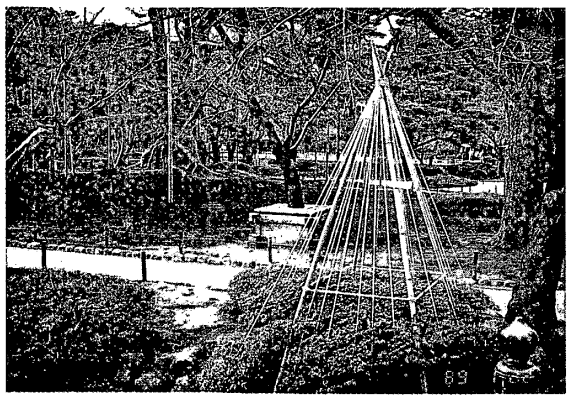
この隣接を競い、交換するコミュニティ構造が相乗して緑景を拡大する。つまり、文化的意味の懸け合いが街や家の風格に繋ってい

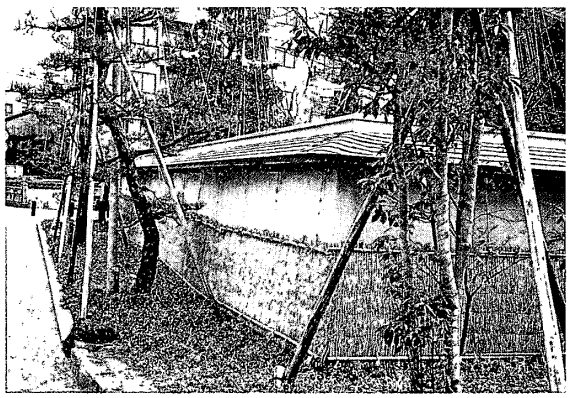




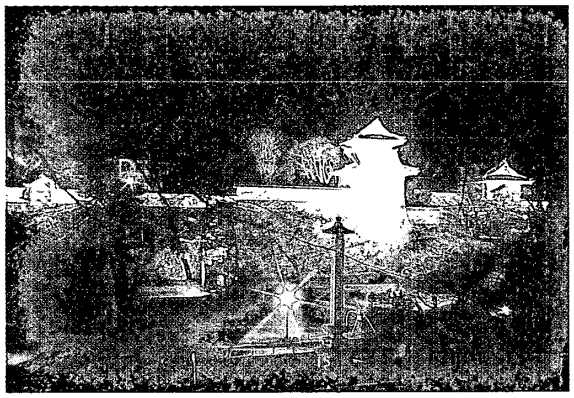




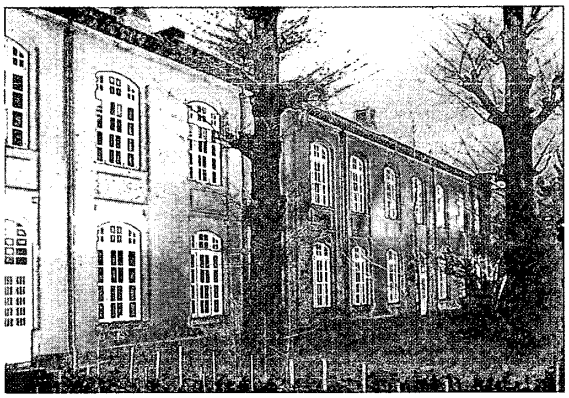




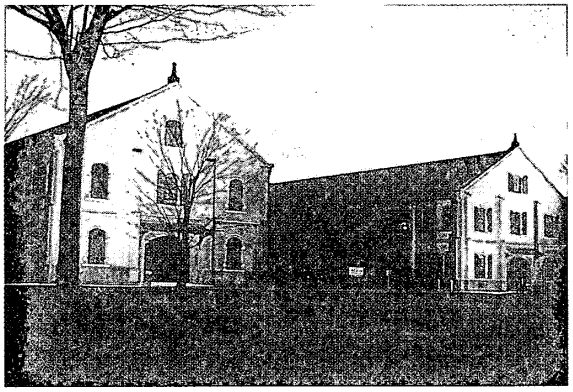
●雪吊りの色景８態・金沢市内にて。



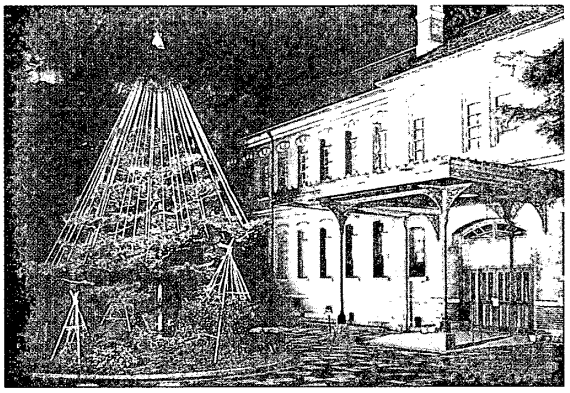
●金沢城石川門



●金沢市立図書館

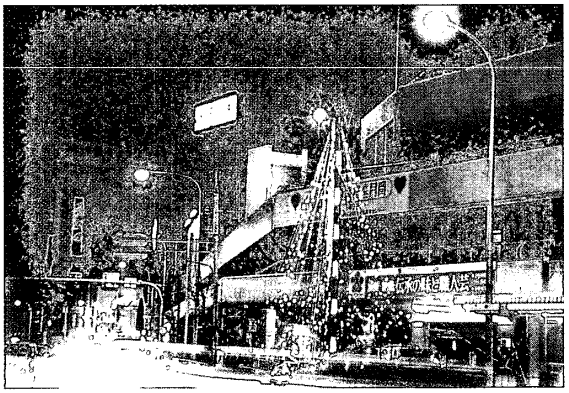


●石川県立歴史博物館（旧金沢美大）



●石川県立近代文学館（旧四高）

●石川県健民公社（旧陸軍偕行社）



●金沢市武蔵ヶ辻

（ライトアップ写真提供・北陸電力・清水誠一氏）

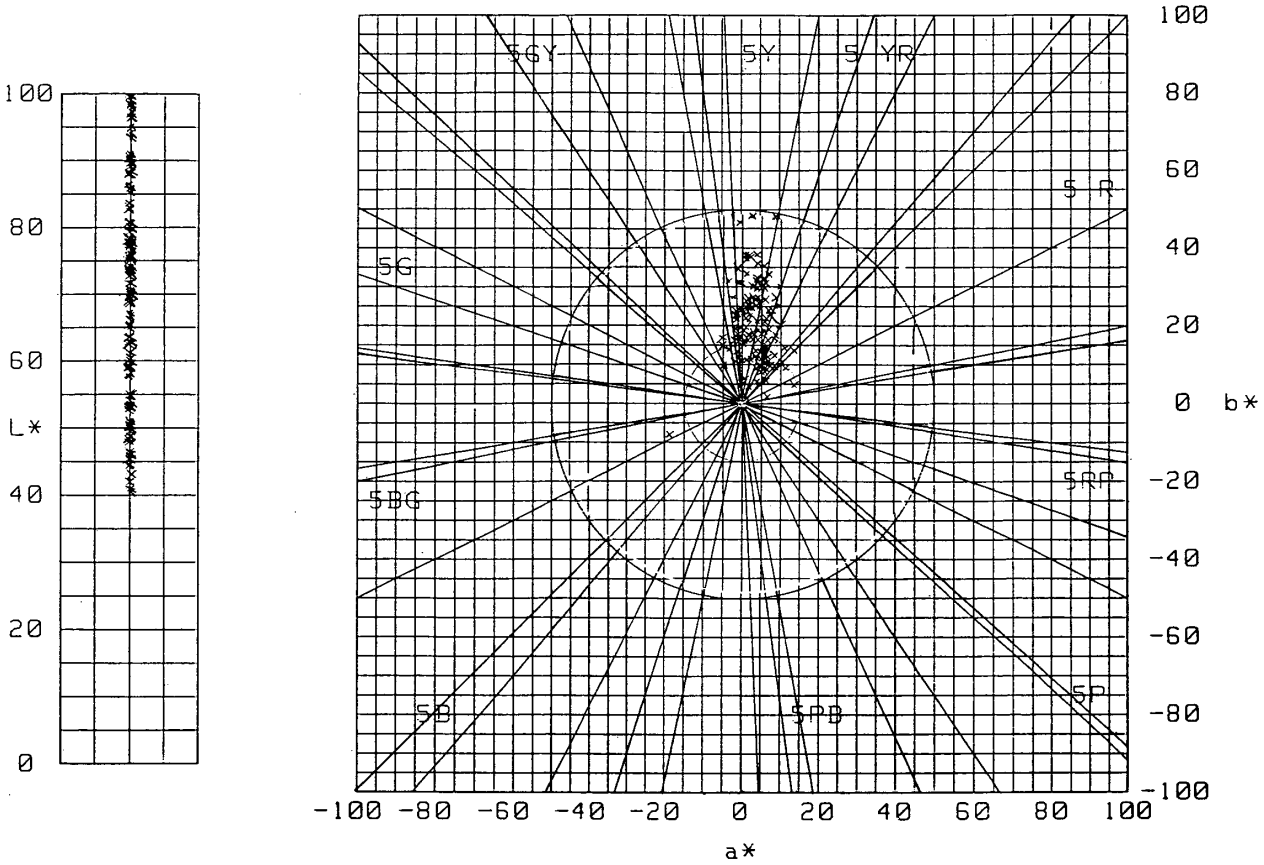
く典型である。

類例としてイギリスの街々に見られる、赤いバラの花の垣根に街中のソサエティが風格化されているといった伴示的色彩環境にも通じている。

3．光景からの問い。

都市に夜光景の概念が登場するのは18世紀末のパリ市からである。都会の夜の明かりは、3つの目的と同格化される。ひとつは夜道の安全確保である。第2には、夜も昼のように都市空間を活用したいとの願いである。野球場やテニスコートのナイター設備がこのことを説明する。民俗学者柳田国男の明察としてもよく知られている。第3は、美しく飾られた街灯やネオンのように美的機能としての存在である。百万ドルの夜景のような都市全体を格調づけることにもなる。

東　京（1990年）



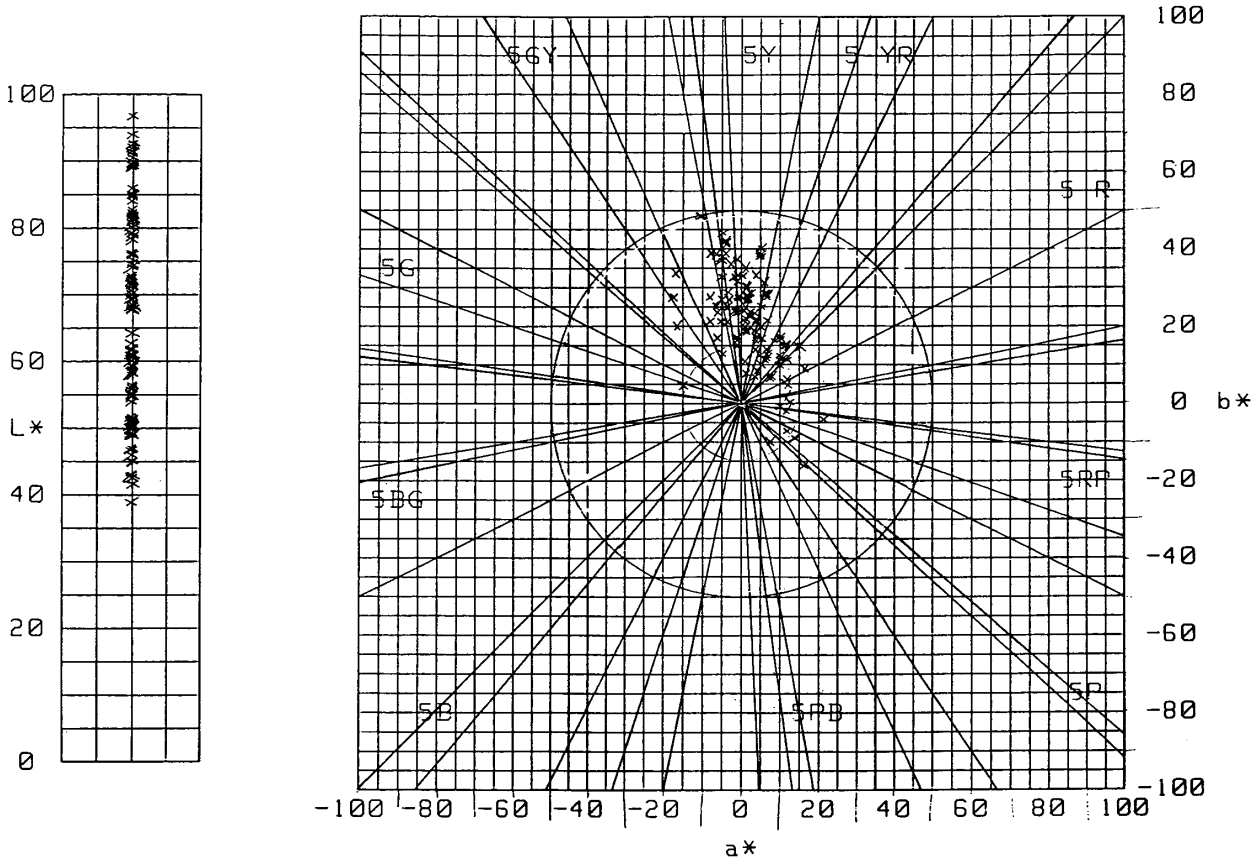
・西 新 宿

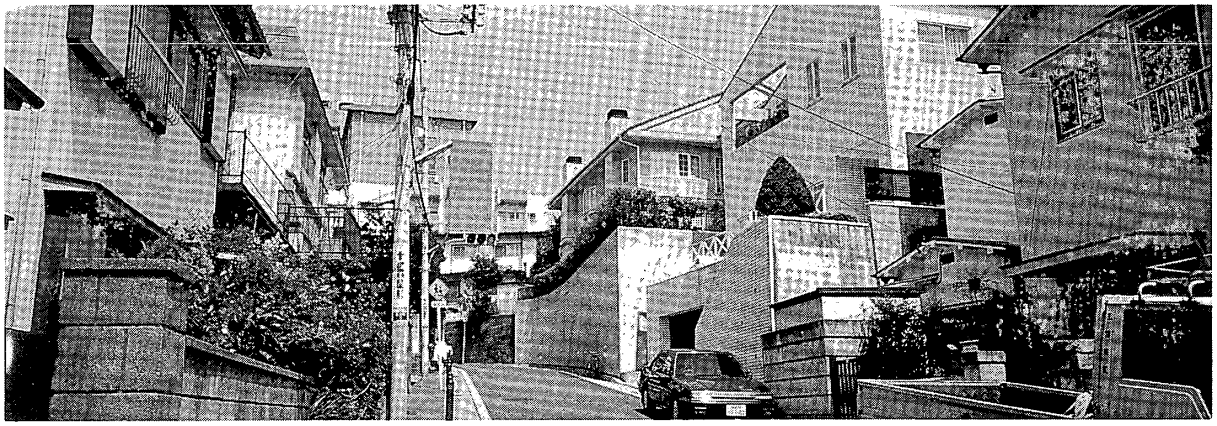
●今日、東京には文化、文明のあらゆる事象が擦り込まれている。そのことが色彩現象をも多様化させている。したがって、東京の色彩を繙くことは東京の境遇に出合うことでもある。本調査による結論を先に述べるならば、東京の色彩は、複合化した都市機能によって、高度に発達成長を続ける内奥が滲み出ている。サンプリングのテストチャートは、上野、新宿界隈をはじめ、JR 山の手沿線よりの望見や通景である。

結果として、色彩特徴は、全体に高明度で低彩度が主軸をなし、色相差はアクセントカラーにおいて大きい。

色相は、うすいスカイやグレイッシュスカイ系の高明度が多く、都市観相の基調色をなしている。そして、無彩色、灰色による無味乾燥な街景の流れに変化が生まれている。また夥しい原色のサインボードも、点描効果の疑似体験になる。大都会東京のしたたかな境遇なればこそである。

横　浜（1990年）



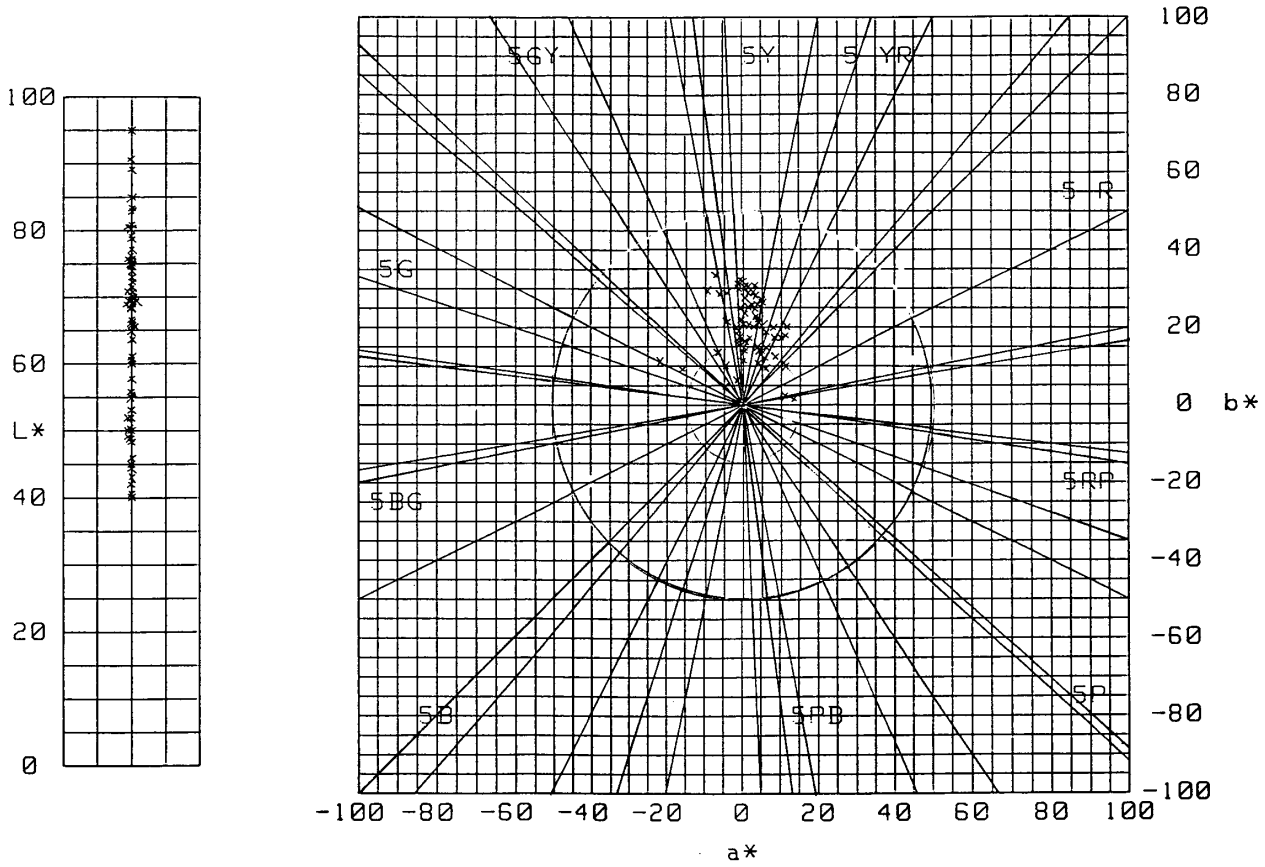


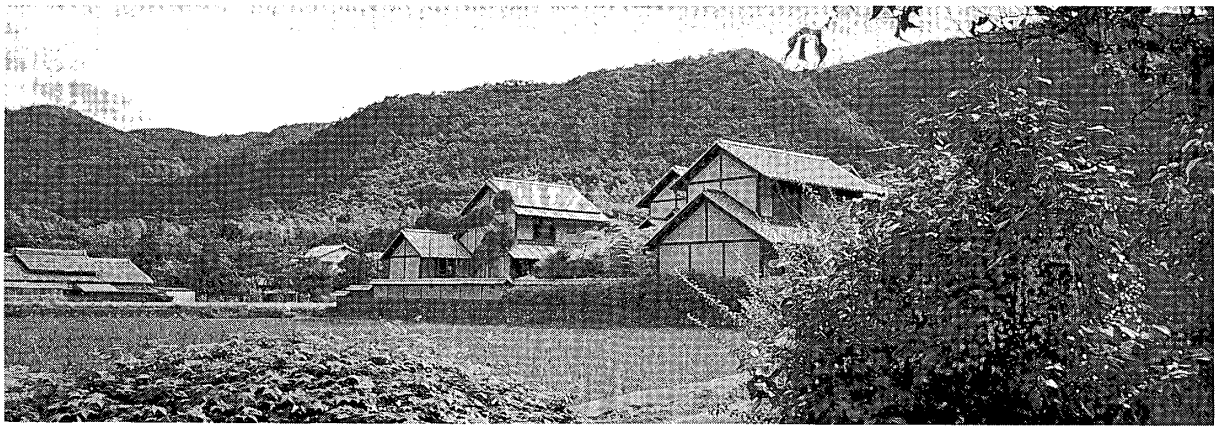
・山の手住宅街

◎横浜は海洋性都市である。人口300万人余の大都市横浜が海に恵みを求め発展してきた歴史は、神戸と共に特筆されるべき境遇である。それゆえに、色彩景観からは、都市問題の良否に関わることなく都市情報が得られることが判明した。たとえば、白い色は例外なくオフホワイトとして使われ、気品や風格を見せてくれる。白い街景の気品度が、かつて名古屋において改善の注視点になったこととは対象的である。

調査の明度ダイアグラム（L* 図）でも読めるように、明度点の累積が、およそ、L* 50、60、70、90のピッチに集中していることが興味深い。つまり、街景の明るさにリズムやコントラスト、脈絡が構造化されている。このことは、同じグラフに見られる色相や彩度の巾広い分布状況より以上に境遇要因大なるものと見做されねばならない。なぜならば、明暗のリズムは刺激特性が波状的であり、そこには港町特有の色彩譜が明示されるからである。ウオッチングは、関内、横浜駅西口、中央桟橋、（山下公園）、山手地区等である。

京　都（1990年）



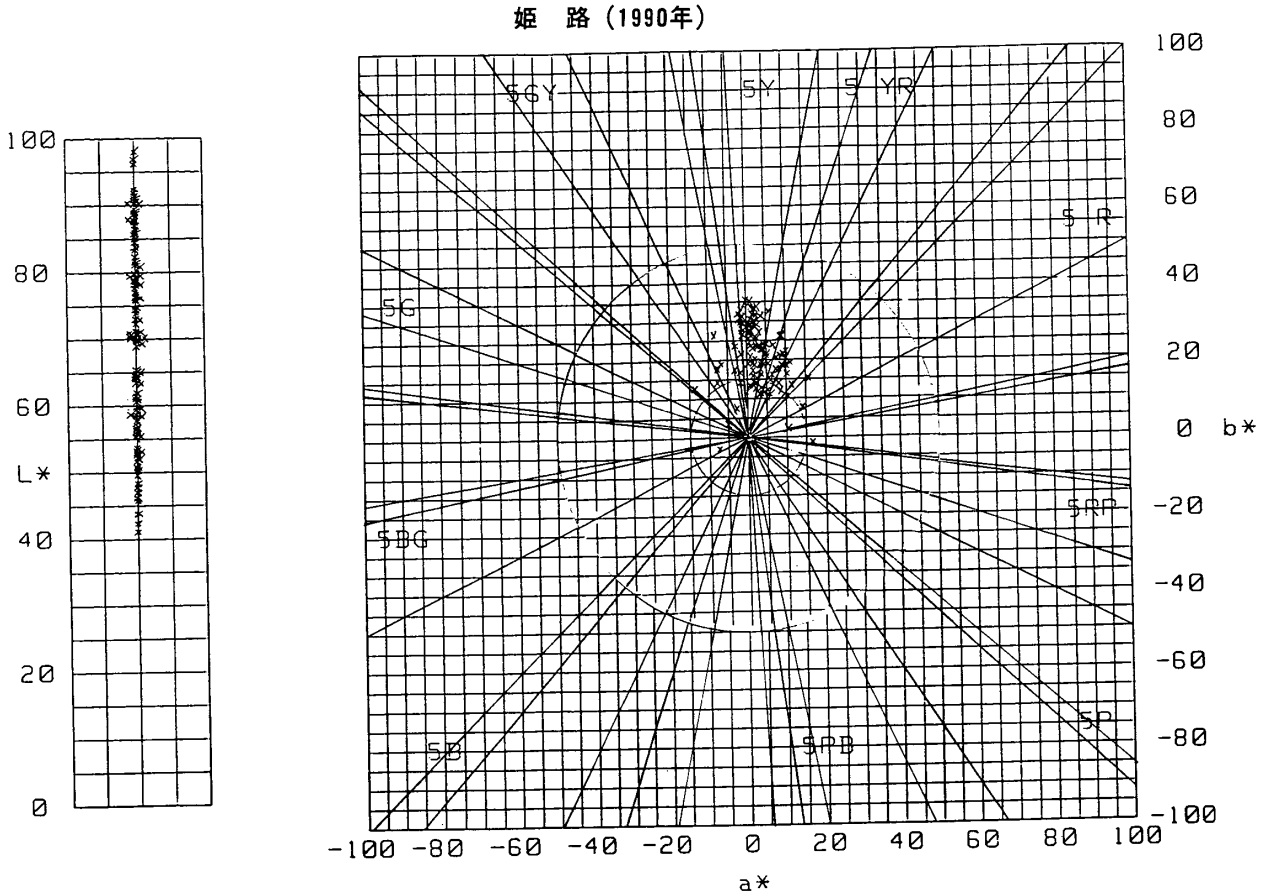


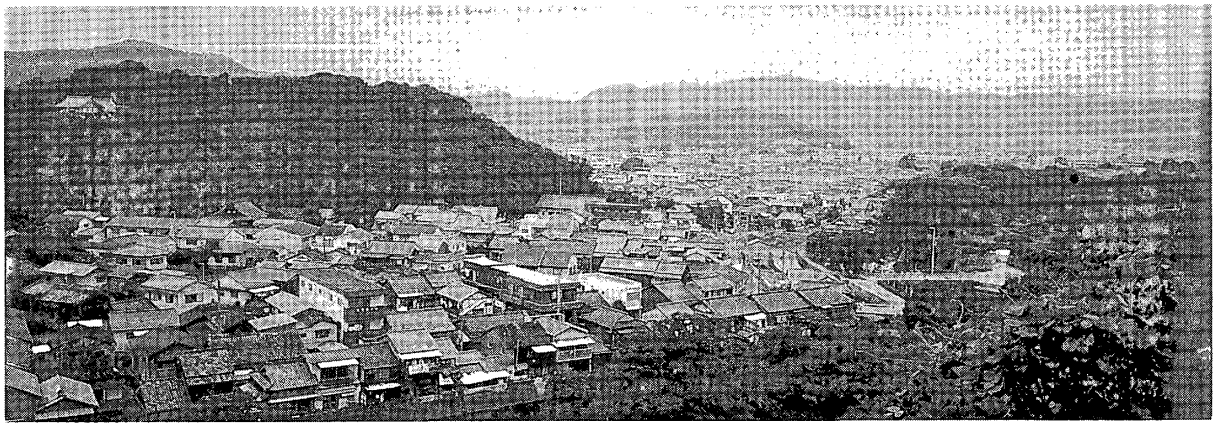
・奥嵯峨野

●京都における環境と色彩環境の相関性ほど、風格をめぐる論点となるところはない。

それは、都市京都における色彩現象が、見える街から京都らしさを読み取ることを不可能にし始めているからである。よく、文章における蟲喰い量は30%で判読不能になると言われている。景観の個性喪失も例外でない。たとえば、京都の景観基調色であるじゅらく色（生壁色）や白鼠（しろねず）、明るい灰色の屋根瓦の色景が広範囲に失われていく現況などである。原因は、1980年代中頃より始まった、日本経済の超高景気による、土地投機と担保化の進む中で、マンションを始めとするビル建築が、京の色と影の美しさを断った。

ダイヤグラムに表われたように、象徴色の主格範囲の保全が今後の課題である。ただ、都市の明るさにおいては、中明度から高明度に亘る快適線がなんとか確保されている。かつての京都の記録があればこの明度点は、中明度の狭いレンジで京都らしさを説明していたはずである。カラーウオッチングは京都市街主要地点と一部郊外（嵯峨野歴史的風土特別保存地区等）である。





・姫路城より望む市街

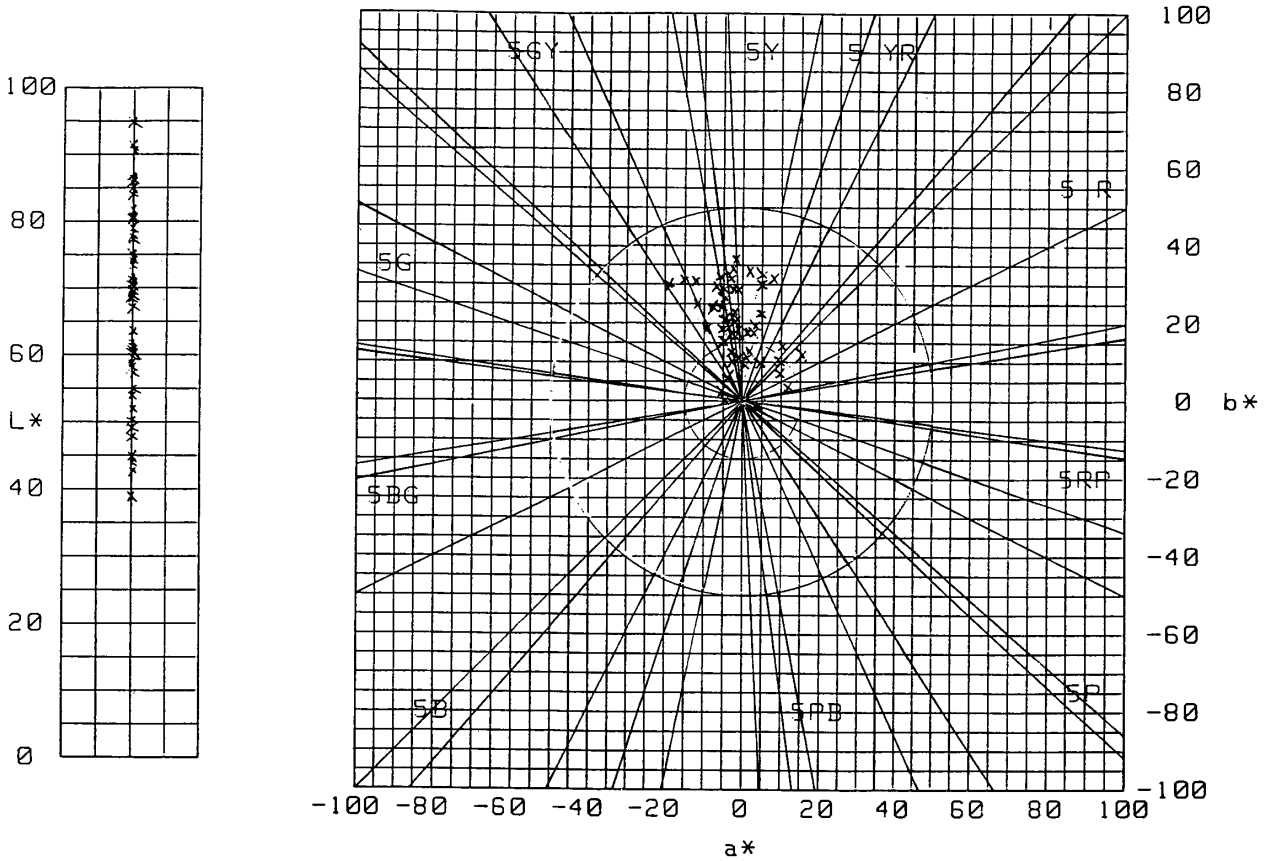
○播磨、池田輝政の城下町姫路の象徴色は、姫路城（白鷺城）である。白練（しろね）、白である。

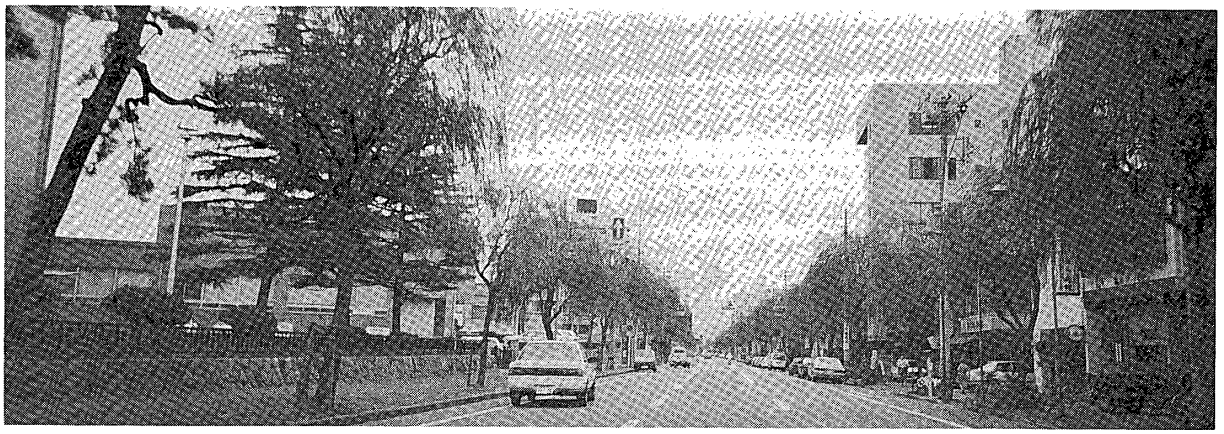
播磨平野と瀬戸内に面して形成された姫路には、交通の要地ゆえの特徴が市街地の色彩景観から伺うことができる。都市の生い立ちに起因する風格が、色彩現象となって表われ説明されるとするならば、その典型的都市といえる。古くは14世紀以来のまちづくりと、明治以降軍都を経験し、第２次世界大戦による都市消失の経緯が、そこここの色彩送択に生かされている。

たとえば、JR 姫路駅南口より姫路バイパスに伸びる駅南大路地区における再開発計画の色彩コードと修景は、長い歴史を気遣いながら、都市の継承感を最大値にするよう配色されている。ちなみに姫路の都市分類は流通生産文化都市である。ガイドラインであるカラーレンジ（色域帯）は、兵庫県が県域全体の色彩調和のために提示したものである。

また、修景モデルとして注目を集めている JR 駅前大手前通り地区の色彩計画では、何よりも姫路城の風格演出に細心の注意が払われている。

新　潟（1990年）



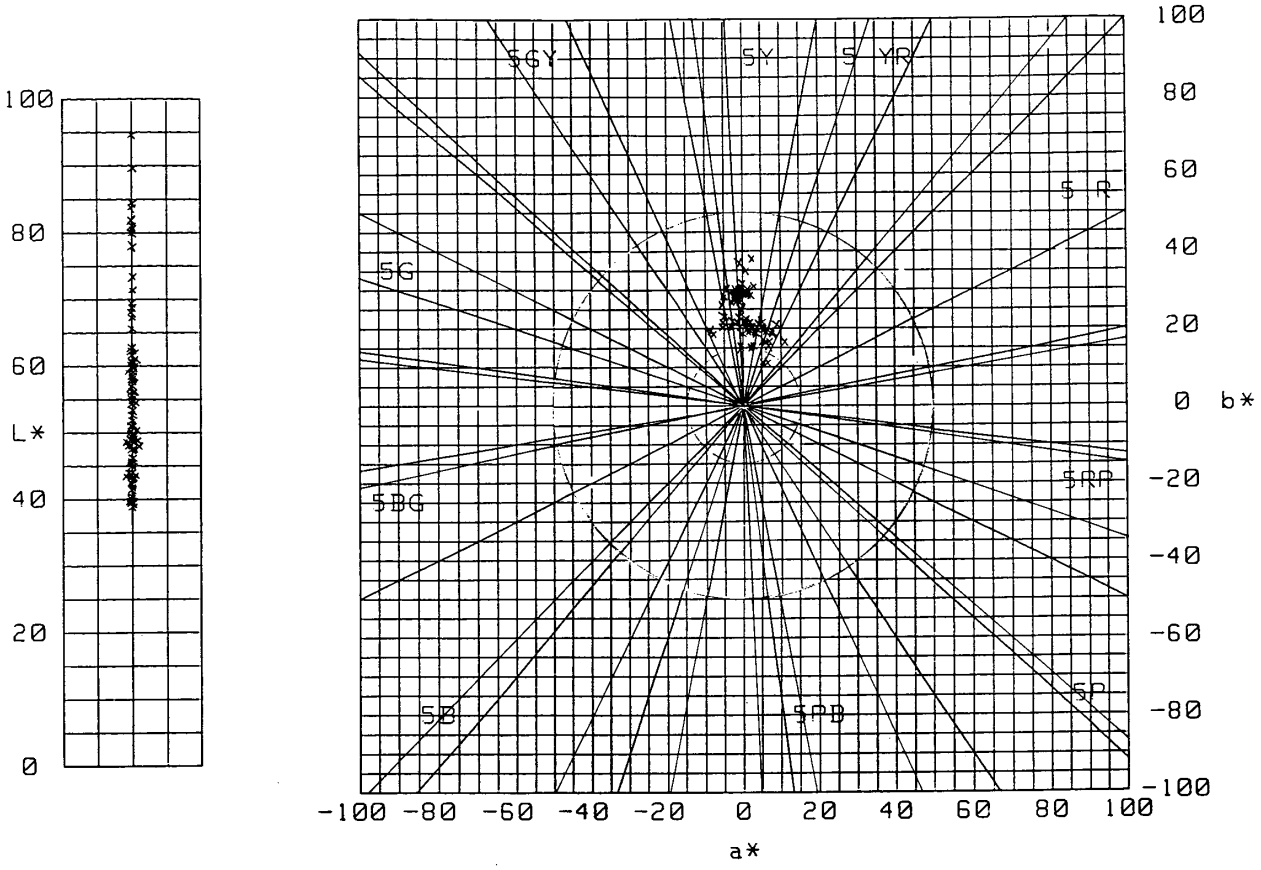


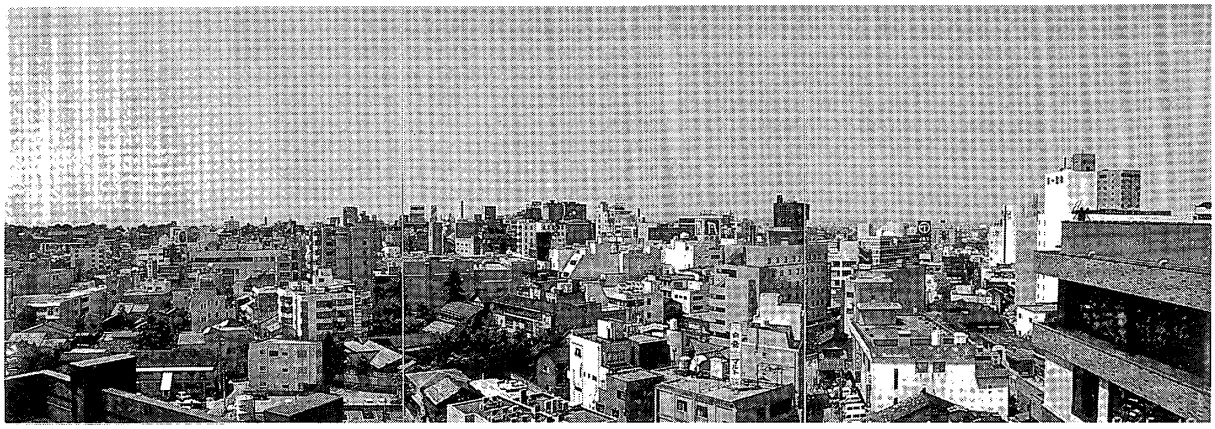
・柳の新潟市街

●新潟市は、信濃川河口に位置する港湾貿易産業都市である。1868年の開港ゆえに、都市の歴史は新らしい。色彩調査において境遇に関する事項が２項見えてきた。そのひとつは、河口都市の宿命と思われる成り行きに順応する素直さ感である。ことに、信濃川と並び位置して日本海に流入する長大河、阿賀野川の二大河川は、常に洪水の危険と背中合わせを強いられてきた。また風雪霧散の条件も加わることで、明るくて余り境遇にこだわらないカラーゾーンが浮かんでいる。

第２はダイアグラムにも抽出されたように色相域は拡散気味で整序された送択とは言えない。しかし平野部を背にした広大な空間が、マイナスの色彩要因を吸収し、むしろちりばめの効果さえ感じさせているところが興味深い。レインボタワー（新潟交通）の虹色も一例で他都市では見られない。そうは言うもののしかしまた、本調査時に於ける、新潟の色景で説明可能な境遇要因は快適性の限度一杯に達しているものと見做される。

金　沢（1990年）





・金沢市街中心部

○金沢の境遇は、本件のリサーチから診断する限り、日本的風土が最も色濃く残っている優等空間といえよう。その背景には、京都に於ける風格保全の困難性に代表されるように、伝統を誇る各都市が、留処が無い景観破壊に晒されていることと対比する。さらには、都市の個有性を計る街景の明るさが、中明度にほぼ安定的に集中していることは、高く評価されてよい。この境遇から生まれた環境財は、伝統都市金沢にあって残さるべき原点ともいえよう。

色調に関しては、加賀藩以来の伝統景観色と近代的建造物の色彩計画におけるカラーレンジ（色域）をめぐる調整が課題として残っている。都市の活力を養いながら、歴史を刻んだ文化を保全するには、まさに、この都市の生い立ち境遇を現代の手法で検証し、加減乗除しなければならない。

これらの要因が重なり合って、今日では、「ライトアップ」への期待感が都市の風格を助長することとなっている。パリの街では極彩色の光景が禁止されていることなどは、その快適性を追認する市民意識（シチズンシップ）として先駆とされている。

今日では、建造物への投照射が多く見受けられるようになったが、そのシステムデザインについては新たな問題が喚起されないわけでもない。たとえば、夜は静寂、安息によってこそ都市の価値を証するはずであるとの確信論も少くない。

以上、色彩を問う背景の主要因について考察をして来たが結論として次の諸項にまとめることが出来た。

文化を分け知る方法論として設定をしたテーマとは言うものの、色彩デザインから都市格を問うことは用意ではないことを実感した。

都市論にも、環境論にもほとんど触れられていないテーマゆえにでもある。しかし、問題の在り処を整理していくと、この視点が、いかに今日的意義と、来る21世紀に向っての文化論であるかに気付かされたことも事実である。だが、何をして語らしめるかというところでかなりの思案をした。

1．都市の経営に当っては、見るるものとの対話を重視しながら、環境デザインの積極的な位置づけをすること。つまり、色彩を含む環境デザインから、都市の風格を問う試みに移行する政策が確立するならば、今後の金沢論、都市一般論にとって、かなりユニークな視点となろう。

なぜなら、格が人格に類比するならば、環境デザインが目的とする総合調和性と、人格形成の総合性の間に、類比関係が成り立つからである。したがって、今後都市金沢を論じるには、政治、行政、産業の分野と同格に都市環境デザインの分野を組み込むことが期待される。

2．都市保全（City Conservation）のために環境デザイン（色彩景観）の定期診断を行うこと。たとえば一般的評判として、金沢は、好感、好印象を常に保っている都市である。これを保持、保全、保護、保存するためには、定期的な環境デザインの診断が必要となる。

具体的には、景観条例の発効や、市民による景観ウォッチング監視システムの確立が予定発案されよう。たしかに今日では、環境アセスメントの思想と方法が確立され、大気の汚染や騒音、水質汚濁の測定など診断システムは一層充実しつつある。だが、景観環境のような、見えるものの都市の質や風格については、いまだにそのシステムとスタンダードを持つには至っていない。

金沢市は昭和43年（1967年）全国に先んじて、伝統環境保存条例を施行し保全に役立てた評価は高い。それゆえに、この実績をいち早く景観のメンテナンスシステムに継いで行くことが重要である。いつでもどこでも調和のとれた美しい環境の中に市民が居住することこそ善政の最大公約だからである。

たとえば色彩環境をめぐるメンテナンスのユニークな例として、函館市の市民グループによる、失われた函館の色を再発見する会の活動が注目される。周知のように函館には、明治の開港以来数多くの洋館がペンキ塗装されてきた。

ペンキは，塗り重ねてメンテナンスに代えることが多く、したがって、人為的に剝離してゆくと、かつての色彩が堆朱模様になって現われる。この方法に着目した明敏さもさることながら、眠りから醒めた都市函館の蘇えりと、環境保全の政策例への期待も大きい。

3．都市美宣言のすすめ。

スポーツ選手が宣誓をして競技を開始するように、政策や立案の展開に当っては、一定の行動パターンに乗ずることも効果的である。たしかに、都市環境を説明するために、国際都市宣言や文化産業都市、あるいは交通安全都市、緑の都市宣言等が全国で試みられてい

る。だが都市景観や色彩の美しい都市を自律的に宣言した都市はまだない。理由は、美しいとは何かについて、それが都市の共有財であることへの認識がなかなか高まらなかったからであると考えられる。しかし、本稿事例においても散見出来たように、明らかに都市は、その表情によって格付けされ、価値付けされようとしている。世界の恋人都市となったモナコ・モンテカルロの色彩景観は、故、王妃グレースケリーが、嫁ぎ来る条件に、自らの肌色、ピンクホワイトの街景色に誘導することがあったという。

本稿にウォッチングした都市のみならず、いま自助努力の限界に挑戦する狭間で美的宣言を待っている都市は多い。

（以上）

（平成２年10月15日受理）

・資料文献

「ウェルシー・ポリス金沢への道」金沢経済同友会・山岸（1990）
「多摩ニュータウンベルコリーヌ南大沢」住宅・都市整備公団（1990）